

はじめに

私の最も好きな和歌、

“ひさかたの光のどけき春の日に

しづ心なく花の散るらむ”

(紀友則、古今和歌集)

を思い浮かべながら、釜の煮える音に耳を澄ませ、柄杓から流れ落ちる湯の音を聞き、漂いいつる茶の香りに至福の悦びを感じるとき、これが「茶の湯」なのかと考えてしまいます。古希を過ぎた頃より、千利休という人物に対する畏敬の念が益々高まり、茶の湯への興味が一層深まってきました。もともと、歴史に関心をいただいていたので、茶室に座り静寂の中で目を瞑ると、戦国時代の人々の生き様と葛藤が蘇ってくるような気がします。

一方、瞑想からふと我に返り、茶室の中を眺めているもう一人の俗世間に住む自分があるのに気がつきます。茶室には、如何に多くの茶道具が千差万別に設えてあることか。しかも、日常のありとあらゆる素材を使って合理的につくられているのです。意外に利休は科学的思考が強かったのではないかと勝手な解釈をしたくなります。総合芸術と呼

ばれる茶の湯を科学的に紐解くなどおこがましいことではありますが、これまで学んできた知識を「茶道具」の理解に、少しは役立てたいと筆を執ることにしました。茶の湯とは不思議な世界のようなのです。芸術の精神的領域には、とても足を踏み入れることはできませんが、茶道具を材料科学の領域からそっと垣間見ることにしました。果たして、利休の考えた侘び寂びの精神も見えてくるのでしょうか。

「侘び茶」（草庵の茶）は、室町時代（1336～1573）中期の茶人、村田珠光（1423～1502）が一休宗純と出会い、足利義政の知遇を得て創始したとされています。その後、「侘び茶」の精神は、戦国時代の堺の豪商で茶人の武野紹鷗（1502～1555）、茶聖と称される千利休（1522～1591）へと受け継がれ、開花完成することになることは言うまでもありません。おりしも、西欧ではルネッサンスを代表するイタリアの天才芸術家であり科学者のレオナルド・ダ・ヴィンチ（1452～1519）が、芸術と科学を融合しながら活躍していました。

岡崎 正之

カバー表紙写真提供

大名物 唐物肩衝茶入 銘遅桜
(三井記念美術館のご厚意による：図8参照)

国宝 曜変天目茶碗 銘稲葉天目
(静嘉堂文庫美術館所蔵)
(画像提供/静嘉堂文庫美術館/DNPartcom：図9参照)

黄金の台子
(復元/名護屋城博物館のご厚意による：図34参照)

カバー裏表紙写真撮影

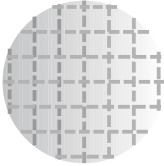
猪の目窓
(宇治田原町正寿院のご厚意による)

材料科学の視点から眺めた
茶道具の素材と歴史

目次

はじめに	1
第1章 茶室における茶道具の世界を愛でる	9
1-1 茶室への誘い	9
1-2 茶道具の四季	15
1-3 茶道具の名品	19
1-4 歴史的日中貿易と唐物茶道具	29
1-5 江戸時代以降の和物茶道具	32
第2章 茶道具素材を科学する	37
2-1 物質の成り立ち	37
(トピックス：炭、陰陽五行説)	
2-2 材料の分類と性質	48
(トピックス：名水)	
2-3 セラミクス材料	51
(トピックス：海のシルクロード、カオリン)	
2-4 金属材料	70
(トピックス：黄金の台子、たたら製鉄、刀と釜)	
2-5 高分子材料	85
(トピックス：竹、緑茶、絹とナイロン、有機ガラス)	
2-6 複合材料	114
(トピックス：土壁、繊維強化プラスチック)	
2-7 材料の強さ	116
(トピックス：応力-歪曲線)	

2-8 材料の接合	120
(トピックス：いがらくり法、ほぞ継ぎ、生体接着 分子、漆)	
おわりに	130
謝 辞	133
参考文献	134



第1章

茶室における 茶道具の世界を愛でる

1 - 1. 茶室への誘い

茶の湯の醍醐味は、茶事にあると言われていています。お茶を飲むだけの会は茶会、料理まで含む本格的な会を茶事と呼んでいます。人々が集う場所が茶室であり、「一期一会」の出会いになることもあり、亭主は最高の「おもてなし」をするために数々の工夫を凝らすことになります。その必需品が点前道具です。その他にも、鑑賞を目的とした飾り道具や料理を出すのに必要な懐石道具、準備のための水屋道具があります。これらを総称して茶道具と呼んでいます。茶道具には、花鳥風月、四季折々の風景が描かれていることが多く、心引きつける美学が存在するようです¹⁻³⁾。

茶の湯は、お茶を飲む癒しの一時に味わう心の安らぎと同時に、茶道具の鑑賞はほのぼのとした美的充実感を堪能

させてくれるものです。時として、ユーモラスな動物の表情を味わうこともあり、源氏物語や竹取物語のようなおとぎ話の世界へタイムスリップしたような雰囲気を味わうことができます。

千利休は、天台座主であり歌人でもあった慈円（1155～1225）の和歌「檜の葉のみみじぬからにちりつもる 奥山寺の道のさびしさ」を挙げて、露地のしつらいについて語ったと言われています。茶室の基本は四畳半ですが、千利休の作と伝えられる国宝「待庵」の茶室（図1）は二畳室床です³⁾。数寄屋造りの原型となるもので、現存する茶



図1 国宝待庵茶室と平面概略図
 (妙喜庵並びに画像提供便利堂のご厚意による)